



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	『トム・ブラウンの学校生活（1857）』の再検討：トマス・アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料としての可能性(fulltext)
Author(s)	鈴木,秀人
Citation	東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・健康・スポーツ科学, 56: 43-53
Issue Date	2004-10-29
URL	http://hdl.handle.net/2309/2931
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

『トム・ブラウンの学校生活 (1857)』の再検討

トマス・アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料としての可能性

鈴木 秀 人

健康・スポーツ科学*

(2004年6月3日受理)

1. 緒言

1834年から41年まで、英国のパブリック・スクールのひとつであるラグビー校 (Rugby School) に学んだトマス・ヒューズ (Thomas Hughes) が、同校における自身の体験を下敷きにして書き表したスクール小説『トム・ブラウンの学校生活 (Tom Brown's school days)』は、1857年4月に初版が出版された。この小説は大変な人気を博し、その年の11月には早くも5版が刷られ、1890年までには50版近くを重ねることになるが、その間にはフランスやドイツでも翻訳出版されるなど、当時としては記録的なベストセラーとなった¹⁾。

この作品の中で作者のヒューズは、様々なスポーツ (注1) に熱心に取り組む少年達の姿を繰り返し描いている。例えば、主人公のトム・ブラウン (Tom Brown) はラグビー校に入学したその日にフットボールの試合に出場してしまい、上級生とのぶつかり合いの中で気を失うようなひどい目に遭う²⁾し、また、その後遅く成長したトムは、卒業を間近に控えたある日、学校の代表選手として臨んだクリケットの対抗試合の合間に、恩師や級友とクリケットの意義についてロマンチックに語っている³⁾。

こういった、少年達とスポーツ活動との深い結びつきを極めて印象的に描いたが故にこの小説は、作者のヒューズがラグビー校に学んでいた時期に校長であったトマス・アーノルド (Thomas Arnold) を、スポーツに初めて教育的な価値を見出して積極的に奨励した「スポーツ教育の祖」として神格化する上で大きな役割を果たすことになった。英国の高名な体育史家であるマッキントッシュ (McIntosh, P.C.) は次のように言う。アーノルドの「世評、特に彼がゲームに関心を持っていたとするそれは、ラグビー校の生徒であり、クリケットのキャプテンであり、アデレイド女王の前で行われたフットボール試合に出場したトマス・ヒューズが書いた『トム・ブラウンの学校生活』に相当に影響を受けたものである」⁴⁾。またムティマー (Mutimer, B.T.P.) も、『トム・ブラウンの学校生活』は「アーノルドの名を広く世に知らしめただけではなく、アーノルドはゲームの主唱者であったという信仰をも生み出すことになった」⁵⁾とし、阿部も、アーノルドは「『トム・ブラウンの学校生活』の助力を得て、偉大な校長、アスレティシズムの礼賛者として神格化の一步を辿り始めた」⁶⁾と理解している。

しかしながら、体育史・スポーツ史の本格的な研究が始まった1950年代以降、このような『トム・ブラウンの学校生活』を根拠にして作り上げられたアーノルド像は否定される方向で研究が積み重ねられ、アーノルドをスポーツ教育の祖と神格化した所謂「アーノルド神話」は崩壊していくことになる。そして、アーノルドは「スポーツ教育の祖」ではなかったという歴史的事実が明らかにされていくに従い、『トム・ブラウンの学校生活』は、アーノルドの考えを伝えるものではなくて、むしろ作者であるヒューズの考えを伝えるものとして解釈し直されたのであった。つまりそれは、『トム・ブラウンの学校生活』という小説が、アーノルドの真実

* 東京学芸大学 (184 8501 小金井市貫井北町4 1 1)

の姿は伝えていないものと、言わば烙印を押されたということを意味すると言える。

本論文の目的は、こういった『トム・ブラウンの学校生活』にこれまで下されてきた評価に対して、新たな視角から異議申し立てを行うことにある。即ち、『トム・ブラウンの学校生活』というスクール小説を、アーノルドを知る資料という視角から再検討することにより、特にアーノルドのスポーツについての考え方を知る資料として有するその可能性を明らかにしようとするのが本論文の目的なのである。

2. 先行研究の検討

2.1 アーノルド神話はなぜ崩壊したのか

最初に、スポーツ教育の祖というアーノルド像が一貫して否定されてきた研究動向をフォローし、アーノルド神話はなぜ崩壊したのかについて確認しておくことにする。

このアーノルド神話が崩壊していく出発点となったのは、1952年にマッキントッシュが発表した“Physical Education in England since 1800”の中で示された以下のような見解である。マッキントッシュは、スポーツを抑圧或いはせいぜいのところ黙認していたパブリック・スクールの教師達の態度が、1860年代までには積極的な奨励へと変化していったことを明らかにした上で、「この変化は、しばしばラグビー校校長のアーノルド博士によるものとされてきたが、あまりにも多くを彼の功績によるものとし過ぎたのではないかと述べ、それまでに信じられてきたアーノルド神話に対して疑問を投げかけたのである⁷⁾。そしてマッキントッシュは、「アーノルドがクリケットやフットボールを、その教育的な価値を認めて、直接、意識的に奨励したという証拠は乏しい」という事実を指摘し、ラグビー校においてスポーツ活動が盛んになったのは、「生徒による自治を公認したことが、結果として組織的ゲームが発展していく土壌を提供した」のであって、それは教育的価値を見出して奨励されたというよりも、アーノルドが「校内の規律を維持し、自分の意図した改革を達成する上で生徒達の協力を得るために支払った代償 (the price) なのである」という説を提示したのである⁸⁾。

ここでマッキントッシュが示した見方は、基本的にその後の研究者達にもほぼ踏襲されていく。そこではマッキントッシュが注目した、アーノルドがスポーツに「教育的な価値を認めて、直接、意識的に奨励したという証拠は乏しい」という事実が、そこでもアーノルド神話を否定する主要な根拠とされている。例えばムティマーは、「証拠が全くないことから、19世紀後半に見られたようなゲームの積極的な奨励をアーノルドは行わなかったということは可能である」と述べ、「後に考えられたような、性格の形成を目的としてゲームを奨励するというのを彼は決して行わなかったし、行うことを考えてもいなかったのは確実である」と言う⁹⁾。同様にマンガン (Mangan, J.A.) も、アーノルドの書き残したのものの中にはスポーツの価値に関連する言及は見られないといった指摘を引きながら、「アーノルドは、後のパブリック・スクールの教師達が明確に見出し、そして確信を持って説いた、クリケットやフットボールのモラルを改善する可能性を理解してはいなかった」と述べている¹⁰⁾。

ただし、だからといってこれまでの研究ではアーノルドとスポーツが全く無関係であったとされたわけでは勿論ない。阿部は、スポーツ教育の祖としてのアーノルドを否定したマッキントッシュに始まるそれまでの「見解を了承」した上で、アーノルドは、スポーツやその他の身体活動にもある程度の関心を持っていたと指摘する¹¹⁾。この点については、既にマッキントッシュが「アーノルド自身はクリケットに少々の関心を示し、水泳、体操、そして槍投げにはそれよりも少し多くの関心を持っていた」と述べていた¹²⁾が、阿部はいくつかの資料を丹念に分析することにより、「アーノルドは、明らかに遊びや運動がもたらす気分転換の機能を教育の場で重視していた¹³⁾」という事実を明確に指摘したのである。そしてそこから阿部は、アーノルドが「組織的ゲームを教育の重要な部分と考えていたことは事実のようである」と結論する¹⁴⁾。

その一方で阿部は、アーノルドは運動場の英雄を優遇することはなく、彼が重く見たのは知的、道徳的卓越であって、競技者の卓越した肉体ではなかったことも明確に押さえている¹⁵⁾。そして、「アーノルドがパブリック・スクールの鍛錬法として重視したブリーフェクト - ファギング制度は、クラブ活動の生徒による合議制、共同負担というゲーム・スポーツの自治的運営を導いたといえる¹⁶⁾」とした阿部は、結果的にアーノルドの「遂行したラグビー校改革が、アスレティズムの方向を限定し、ゲーム・スポーツの教育的運営を可能にした、ということは十分に考えられることである¹⁷⁾」というように、アーノルドとスポーツの関係を把握したのであ

る。

阿部がここで言う、プリーフェクト・ファギング制度の活用に象徴されるアーノルドが進めた学校改革が結果としてラグビー校におけるスポーツ活動の隆盛を導く基盤になったという見方も、これまでのパブリック・スクール研究者に概ね共通するものと言える。「生徒による自治を公認したことが、結果として組織的ゲームが発展していく土壌を提供した」とするマッキントッシュの見解は先に紹介したが、マッキントッシュは次のようにも述べている。「ゲームとスポーツは少年達による自治の最も完全な世界であったために、学校を統治していくプリーフェクト制度を強固なものにしたアーノルドの改革から、アスレティズムは予期せぬ刺激を受けた」¹⁸⁾。またムティマーも、「ゲームが発展していく助けとなるような学校の気風をアーノルドは創り出した」¹⁹⁾とし、アーノルドがゲームと直接関連する何かをしたというよりも、ラグビー校の改革を進めたアーノルドの仕事が、その後の組織的ゲーム興隆とその結果として生じる運動競技礼賛の舞台をお膳立てしたと捉えるのである²⁰⁾。

このように、アーノルドがラグビー校で行ったスポーツと関わる仕事とは、直接的にスポーツに働きかけたものではなく、学校改革を媒介にして言わば間接的に導かれたものであるというのが、これまでの先行研究で形成されたひとつのコンセンサスと言える。マッキントッシュはそのことを、改革を達成する上でアーノルドが「支払った代償」と表現したのであるが、この辺の事情については、更にマンガンが詳しく論じている。マンガンは、アーノルドの弟子であるマルバラ校（Marlborough College）校長のコットン（G.E.Lynch Cotton）らに焦点を当てて、彼らがスポーツを行わせた目的は、生徒をできるだけ校内の、しかもプレイ・グラウンド内に一緒にいさせることにあったのであり、組織的ゲームはその手段と見なされていたことを明らかにする。そして、「アスレティズムの起源のひとつは、社会統制の形態（a form of social control）としてゲームが利用されたところにある」²¹⁾として、この時期のパブリック・スクールの校長達がスポーツに期待していた真の目的を暴き出したのである。

以上のような研究の積み重ねは、もはやアーノルドがスポーツ教育の祖として生き長らえていくことを許すはずはなかった。こうして、アーノルド神話は崩壊したのである。

2.2 『トム・ブラウンの学校生活』はどのように解釈されたか

それでは、アーノルド神話が崩壊していく過程において、その神話の形成に大きな役割を果たしたはずの『トム・ブラウンの学校生活』はどのように解釈されたのだろうか。

マッキントッシュは次のように言う。「この小説はアーノルドの死後15年を経た後に書かれたものであり、その影響力はまだ消滅していなかったに違いないとはいえ、ラグビー校における生活の描写としても、またアーノルドのゲームに対する態度を示す証拠としても、かなりの限定付きで取り扱わなければならない」²²⁾。そしてマッキントッシュは断言したのである。「組織的ゲームの礼賛は、しばしばアーノルドの功績によるものとか、或いはアーノルドに負うものとされてきたが、それはトマス・ヒューズの小説『トム・ブラウンの学校生活』が犯した過ちなのである」²³⁾と。

またマンガンは、『トム・ブラウンの学校生活』の中に一人の青年教師として登場し、クリケットの意義についてトムと語り合っているとされるコットンは、その場面において、「ゲームの効用として協力、利己的にならない精神、望ましい気質などが育つことを説いているが、彼がマルバラ校にゲームを導入した主たる理由は、1852年に校長に就任した際に直面した密猟や不法侵入、その他の無法活動といった、校内の規律を維持していく上で解決しなければならなかった問題の中に見出される」²⁴⁾と指摘し、マッキントッシュと同じく、『トム・ブラウンの学校生活』が描いたことと真実との間には距離があるとする。

かかる見解から分かるように、アーノルド神話を崩壊に導いた先行研究において、『トム・ブラウンの学校生活』はアーノルドやコットンのスポーツについての考え方を知る資料としては評価されていないのである。そしてこの小説は、アーノルドよりもむしろ作者ヒューズの考えを伝える資料として解釈し直されていく。例えば阿部は、この物語の中に見られる「団体精神（esprit de corps）ともチーム・スピリットとも呼ばれる協力の精神は、キリスト教社会主義者の“協同”の理念と無縁ではなかった」²⁵⁾と考える。そして、キリスト教社会主義運動に熱心に参加していたヒューズは、「こうした協同の思想を、学校小説というジャンルで宣伝した人」²⁶⁾と位置づけられ、従って阿部は、『トム・ブラウンの学校生活』という小説を、キリスト教社会主義運

動のひとつのプロパガンダとして理解することになるのである。

トーザー (Tozer, M.) も、この小説の中にキリスト教社会主義の思想を読み取っている。そこで明確に指摘されるのは、アーノルドを取り巻いていた優秀な生徒の集まりの中にヒューズが入ることはなかったという事実である²⁷⁾。トーザーは、ラグビー校の優等生であり、アーノルドから直接薫陶を受けて後にその思想を広く世に伝えることに成功したアーノルドの書簡集 “The Life and Correspondence of Thomas Arnold, D. D.” をまとめたスタンリィ (Arthur Penrhyn Stanley) とヒューズを対比させ、常にアーノルドの近くにおいて直接教えを受けたスタンリィとは異なり、ヒューズはアーノルドの内面を十分に知ることができる立場にはいなかったことを強調する²⁸⁾。そしてヒューズの思想は、アーノルドよりも、むしろキリスト教社会主義者であったキングスリィ (Charles Kingsley) から影響を受けたものである、とトーザーは言うのであった²⁹⁾。

こうして、アーノルドとスポーツを結びつける有力な根拠とされてきた『トム・ブラウンの学校生活』は、アーノルドを知る資料としてはもはや評価に値しないものと見なされ、ある意味では葬り去られようとしている。この物語に託して作者のヒューズが読者に訴えようとしたものはヒューズ自身の考えなのであって、そこにアーノルドの真実を見ることはできないとされたのである。しかし、かかる見方は果して妥当なものなのだろうか。

3. 『トム・ブラウンの学校生活』の再検討

3.1 歴史的資料としての信憑性

ところで、アーノルドを知る資料として価値を持たないとされたからといって、『トム・ブラウンの学校生活』の中で作者のヒューズが書いたことの全てが全くの出鱈目で、この時代の出来事を知る歴史的な資料としてもこの小説は信用できないとされたわけではないことには注意が必要である。

例えばスポーツ史の研究において、『トム・ブラウンの学校生活』は組織化の途上にあった当時の近代スポーツの状況を窺い知ることができる第一級の資料として度々引用されてきた。また、ムティマーが「現在まで残されているアーノルド時代の学校生活についての数多くの記述や個人の手紙などが、いじめやゲーム活動、その他ヒューズが描いた描写を裏付けている」として、「ヒューズの学校についての記述、特にそのスポーツをめぐる生活についての記述は、正確なものとして受け取ることができる」と述べている³⁰⁾ように、この小説は、その時代のパブリック・スクール生活の様子を知ることができる歴史的資料としても信憑性を持ちうることは確かなのである。

この小説の歴史的資料としての信憑性については、ブリッグズ (Briggs, A.) が、既に1954年に以下のような一定の説得力を持った見解を提示してもいる。ブリッグズは、スタンリィがまとめた “The Life and Correspondence of Thomas Arnold, D. D.” と『トム・ブラウンの学校生活』がそれぞれ非常に異なった印象を与える書物であることを指摘した上で、「だが、この2つの著作は敵対するものというより、むしろ互いに補い合うものとして見るのが一番よい³¹⁾」と言うのである。「スタンリィは自由に使えた豊富な資料と、個人的にアーノルドと非常に親しかった記憶によって校長の心の中を見抜き、そしてヒューズより遙かに効果的に校長の意図するところを探ることができた³²⁾」とブリッグズは言う。その一方で「ヒューズは、ラグビー校における生徒達の生活の非公式な部分を思い起こさせることに成功し、それはスタンリィ自身が認めるように、スタンリィは全く知らない世界のことだった³³⁾」のである。そしてブリッグズは次のように結論する。「もし、スタンリィがアーノルドの心の中に起こったことを見たとするならば、ヒューズは多くの生徒達の、つまりはラグビー校の一般大衆を構成する全てのトム・ブラウン達の心の中に起こったことを見たのである。」³⁴⁾

このスタンリィの著作と対比させるという分析の枠組みはトーザーも用いているものであるが、かかる枠組みから導き出される結論とは、『トム・ブラウンの学校生活』は、当時のラグビー校の生徒達の実態を伝える資料としては評価に値するというものになる。けれども裏を返せばそれは、アーノルドの真実を伝える資料としてはこの小説には信憑性がないとされたということにもなる。生徒達の姿は正しく伝えたにもかかわらず、同じ小説が伝えるアーノルドの姿は本当に正しくないものなのだろうか。

3.2 アーノルドが果たした役割の位置づけ

ここで、19世紀のパブリック・スクールにおいてそれまで遊びであったスポーツが教育として承認されていく過程の中で、アーノルドがどのような役割を果たしたのかを改めて確認してみることにしよう。マッキントッシュの見解を中心に整理すると、パブリック・スクールのスポーツ活動は次のような道筋を辿って教育として承認されていったと捉えられる。

まず、パブリック・スクールが荒廃していた18世紀後半から19世紀初頭の時期に、生徒達は自由時間に勝手気儘にスポーツに興じ、教師はそれを抑圧するかせいぜい黙認しているといった段階があった。かかる教師の態度を示す例としてマッキントッシュは、フットボールのことを「せいぜい肉屋の俸向き」とか「若きジェントルマンよりも農夫の子どもや人夫に似合っている」などと言って嫌悪したシュルズバリー校（Shrewsbury School）校長のバトラー（Samuel Butler）を上げている。

次に、パブリック・スクール各校で改革が進められた19世紀前半から中頃までの時期には、校内外での生徒の目に余る悪戯を抑制し、自由時間を校内で過ごさせるための統制の手段として、教師が消極的にスポーツを承認する段階がやってくる。マッキントッシュは、アーノルドをこの段階の教師として位置づけている。即ちアーノルドは、スポーツに教育的な価値を明らかに認めていたわけではなく、自らの意図する学校改革を進めるに当たって生徒達の協力を得るために支払った「代償」として、スポーツを消極的に承認したにすぎなかったのである。

そしてこの後パブリック・スクールでは、忠誠心、自己犠牲の精神、協調的態度といった徳性を養う教育としての価値がスポーツに見出され、教師がスポーツを積極的に奨励する段階を迎えることになる。マッキントッシュは、「パブリック・スクールにおけるゲームが組織化され、教育の手段として承認を得たのは1850年代から60年代のことである」³⁶⁾と考えていて、生徒達とともにクリケットやフットボールをプレイし、「名門パブリック・スクールの校長で、これまでフットボールの試合に出場した校長がどこにいただろうかと私はいささかの誇りを持って思わざるをえない」³⁷⁾と語ったアッピンガム校（Uppingham School）校長のスリング（Edward Thring）を、この時期のパブリック・スクール教師を代表する存在として示している。（注3）

マッキントッシュはここで、パブリック・スクールにおけるスポーツ活動の発展過程を、19世紀初頭から中頃までに生じた教師のスポーツに対する態度の変容を尺度に、おおよそ3つの段階をもって把握していると思われるのだが、この区分に従うとアーノルドは、スポーツに対する嫌悪を表明していたバトラーらとは明確に一線を画し、またスポーツを積極的に奨励したスリング以降の教師達とも異質の教育を展開したとされる。つまりアーノルドは、バトラーとスリングがそれぞれ示した全く相いれないスポーツに対する態度の狭間で、バトラーよりもスポーツを好意的に捉えたものの、スリングほどそれを積極的に評価することはなかった校長として位置づけられることになるのである。

先行研究の積み重ねの中で、アーノルドの真実の姿は正にこのように理解されたが故に、スポーツの教育的な価値を強烈に説く『トム・ブラウンの学校生活』は、アーノルドのスポーツについての考え方を正しく伝えるものではないとされたのであった。けれども『トム・ブラウンの学校生活』の中で、自己犠牲の精神の涵養をはじめとするスポーツの教育的な価値を語っているのはアーノルド自身ではなく、主人公のトム・ブラウンとコットンと目される青年教師なのであり、物語の中に度々登場するアーノルドは、同様の考えを述べることは一切なかったということはここで押さえておかなければならない。つまり、この小説によってアーノルドがスポーツ教育の祖として神格化されたのは、そこでアーノルドがスポーツの教育的価値について明確に語っていたからではなくて、読者がこの物語全体から受けとったラグビー校ではスポーツが盛んに行われていたという印象から、だからアーノルドはスポーツを積極的に奨励していたのだと言わば拡大解釈してしまったことによるのである。

従って、『トム・ブラウンの学校生活』というスクール小説がアーノルド自身のスポーツについての考え方を正しく伝えているのか否かをめぐる判断は、物語全体から受ける漠然とした印象によるのではなく、この小説の中でアーノルドがスポーツに関わる場面に何が書かれているのかを個々に検討した後に、初めて下されるべきことなのである。しかしかかる作業は、これまでの先行研究においては全く手をつけられることがなかったのである。

3.3 アーノルドがスポーツに関わる場面の検討

3.3.1 フットボールの試合を観戦するアーノルド

そこでこれから、『トム・ブラウンの学校生活』の中でアーノルドがスポーツに関わる場面を抜き出し、その内容について検討を加えてみることにしよう。まず、第 部の 章には次のような記述が見られる。「いまやボールは、校長邸の壁の下の、味方のゴールの背後に来た。校長と家族の幾人かはそこで眺めていて、少年の連中に劣らず、校長寮の勝利を切望しているらしい模様である。」³⁸⁾(注4)

これは、ラグビー校の少年達が校庭でフットボールに熱中している様子をアーノルドが見守っているという場面であるが、このような形でフットボールの試合をアーノルドが実際に見ることがあったという事実は、アーノルド自身の書簡によって裏付けることができる。1840年10月に出された手紙の中でアーノルドは次のように書いているからである。「ここでは全てがいつも通りに運んでいる。フットボールの試合は大変活気に満ちている。6年級の敗北によって一日がかりの試合には決着が付き、6年級の試合は終わった。校長寮の試合はまだ続いていて、校長寮側が1ゴールを決めた。」³⁹⁾

この他にも、アーノルドが少年達のフットボールを見るということがあったということは、1839年10月にアデレイド女王がラグビー校を訪れた際に、アーノルドが女王を運動場に案内して一緒にフットボール試合を観戦したという事実からも確認できる。この試合に『トム・ブラウンの学校生活』の作者ヒューズとともに出場していたサンデス(Samuel Sandes)は次のように書き残している。「私はボールをトム・ヒューズが蹴りやすい角度にプレスし、彼は2度めのゴールを高く美しく蹴りこんだ。その日の2つのゴールは我々が決めたもので、アーノルド校長とアデレイド女王が観戦してくれていて光栄だった。」⁴⁰⁾

こういった証拠から考えると、『トム・ブラウンの学校生活』の中に描かれているフットボールを観戦するアーノルドの姿は真実であったと言わざるをえない。マッキントッシュは、アーノルドは「自分の学校がその名を与えたフットボールというゲームには全く関心を示さなかった」⁴¹⁾と述べているが、少なくともアーノルドは、校庭で行われている少年達の試合を時々観戦することがあるといったレベルではフットボールに一定の関心を持っていたことは間違いない。そして『トム・ブラウンの学校生活』には、そういったアーノルドの姿が正しく描かれていたということは、ここで明確に指摘できるのである。

3.3.2 クリケットやその他の身体活動に好意的なアーノルド

『トム・ブラウンの学校生活』の中には、フットボール以外の身体活動についてアーノルドが直接語っている場面もある。例えば第 部の 章では、新入生の少年を主人公のトム・ブラウンに引き合わせたアーノルドが次のように話している。「それで、このかたが君と同室するお子さんというわけかね。フム、もう少し活発そうだといいのだが。ラグビー校ぶりの態度と、クリケット精神があって欲しいね。是非長い散歩に連れ出して貰おう。ビルトン・グレインチや、コールディコットの森にね。そしてこの周囲に結構な場所があることを教えてやってくれ給え。」⁴²⁾(注5)

ここに描かれるアーノルドはクリケットに少年を活発にさせる力があると見ており、合わせて野外での散策も少年の成長にとって意味あるものだと考えている姿と言えるだろう。そしてかかるアーノルドの姿も、いくつかの証拠によって真実であったと考えることができそうである。アーノルドは友人に送った手紙の中で、運動場が自由に使える休日にはそこで息子達としばしばクリケットをしたと書いているし、息子達にプロのコーチをつけてクリケットを学ばせてもいた⁴³⁾。このような事実から推し量ることができるのは、アーノルドがクリケットにそれなりに好ましい価値を見出していたらということである。

また、アーノルドが野外で行う身体活動に興味を抱いていたことも、彼の残した書簡から窺い知ることができる。1831年に教師である友人に宛てた手紙の中でアーノルドはこう書いている。「私は生徒と一緒に水浴びに出かけ、力の限り跳んだりあらゆる体操を行ったりし、そして時には彼らと船を浮かべ、或いはボートを漕いだ。私は、彼らがそういったことを常に好んでいたと信じているし、私自身も少年のようにそれを楽しみ、そのことによっていつでもよりよい状態に自分があることを見出していた。」⁴⁴⁾

少年達が行う身体活動のいくつかにアーノルドがある程度好意的であったということは、既に見たようにマッキントッシュや阿部らによる先行研究においても明確に指摘されている。そしてラグビー校の新入生にクリケットと野外での散策を推奨するヒューズが描いたアーノルドの姿は、例えば阿部が言う「遊びや運動がも

たらず気分転換の機能を教育の場で重視していた」というアーノルド像と何ら矛盾してはいない。つまりこの点においても、『トム・ブラウンの学校生活』にはアーノルドの真実の姿が描かれていると言えるのである。

3.3.3 自由時間の活動を統制するアーノルド

更に、アーノルドが直接登場する場面ではないが、第 部 の 章に見られる以下のような描写は注目に値する。「『ところで、校長がやめさせた仕来りなるものを、だれでもいい、挙げてくれ給え。』『獺犬』と叫んだのは、真鍮のボタンのついた緑色のカタウェイ型の上着を着、コールテンズボンをはいた、一人の五級生であった。…（中略）…『なるほど、寮には六、七匹の疥癬だらけのハリヤー犬やビーグル犬が、何年かに互って飼われていたのを、校長が廃止したのにちがいはない。しかし、あの犬を飼っていて、碌なことがあったか。十マイル以内に住んでいる獺場の番人のことごとくの連中と喧嘩騒ぎを起こすくらいが精々じゃなかったか。それならビグ・サイドの撒紙競争の方が十倍も面白いぞ。』」⁴⁵⁾

ヒューズがここで伝えるアーノルドは、少年達の間で人気があった狩猟を禁止しているわけだが、これは果して真実だったのだろうか。この点に関して、マッキントッシュは根拠となる資料は明示していないものの次のように述べている。「アーノルドが行ったことは情け容赦なく無法活動を抑圧することだったのであり、それ故、彼は少年達の獺犬団を解散させ、兎狩りを禁止するなど、上流階級式の田園で行う娯楽とスポーツを抑圧したのである。」⁴⁶⁾（注6）また阿部も、「アーノルドは狩猟や釣りなどの伝統的なジェントルマン・スポーツにはあまり関心を示さなかった」とし、兎狩りを禁止したことにも言及している⁴⁷⁾。

これはマンガンの研究に詳しいが、アーノルドを含めてこの時期のパブリック・スクール教師は、学校周辺の野外で繰り広げられる少年達の野放図な活動の統制に非常に苦勞していた⁴⁸⁾。『トム・ブラウンの学校生活』にも、トム達が近隣の川で勝手な振る舞いをして地主や番人と大きなトラブルとなった事件が描かれている⁴⁹⁾。こういった無秩序な遊びを禁じる一環としてアーノルドが狩猟を禁止したのは恐らく事実だったのであり、その結果、ラグビー校に導かれた状況をマッキントッシュの言葉を借りて言うならば、「必然的にこの後、少年達は禁止されていない娯楽、特に校庭の中で行われるゲームに時間を費やすことになった」⁵⁰⁾のである。

先に紹介した第 部 章の場面に戻ってみよう。ラグビー校の上級生は次のように言うのである。「自分でよく考えて見たまえ。校長は、保存する値打ちのあるものには決して手をつけないことが、きっとわかって来る。…（中略）…もし校長がフットボールか、クリケットか、水浴か、それとも拳闘を禁止するようなことがあれば、僕はそれに反抗する点では、何人にも後れはとらないつもりだ。しかし校長は禁止なんかしやしない - かえって奨励してるんだ。」⁵¹⁾

ここに書かれているのは、無法活動に結びつきやすかった野外での狩猟を禁止した代わりに、校庭の中で行われるスポーツは生徒達に保障しているアーノルドの姿である。つまり、そのような形で少年達の自由時間の活動を統制するアーノルド、マッキントッシュが言う「生徒達の協力を得るために支払った代償」としてスポーツを承認するアーノルドの姿を、ここには明らかに窺うことができる。

これに加えて、第 部 の 章に見られる「トムは、公に認められたクリケットとか、ファイブズとか、水泳とか、立入許可区域内での魚釣とかいった遊びをする時間をもっと欲しいものだと思い、またそれを要求するのを当然のことと考えていた」⁵²⁾という記述においても、自由時間に行われる諸活動には公的に認可された活動とそうではない活動があったということが描かれており、その背後には、自由時間の活動を統制していたアーノルド校長の存在を見ることができるようと思われるのである。

3.3.4 クリケットの対抗試合を観戦しないアーノルド

このように見てくると、『トム・ブラウンの学校生活』というスクール小説には、アーノルドのスポーツや身体活動をめぐる真実に近い姿が実は描かれていたということが徐々に明らかになってくる。その姿は、フットボールを嫌悪したパトラーらそれ以前のパブリック・スクールの校長達とは違ってスポーツや身体活動に好意的でありながらも、それらを生徒達を統制する手段として消極的に承認するというものである。そしてかかる姿は、その後のスリングをはじめとするスポーツを積極的に奨励し、自らも生徒と一緒にプレイした校長達の姿とも明らかに異なるものであった。

『トム・ブラウンの学校生活』の第 部 章には、そういったアーノルドの姿が象徴的に表されている。「校

長はトマス(老人)の立会の下に、クリケットの主将と会見したあとで昨日の朝、湖水地方に出発された。そのとき校長は、クリケット正餐を催すべき教室とか、その他このお祭り行事を満足に実行するに必要な万端の処置につき打合せをされ、そしてかれらに、校庭から一切のアルコール飲料をしめ出すように、また九時までに校門を閉じるようにと警告されたのである。対ウェルズバーン試合は昨日大成功裡に終了し、学校は三つのウィケットを得て勝った。そして今日は、クリケット暦中の最大の催しである対マラバン試合が行われている。⁵³⁾

即ちここに描かれるアーノルドは、重要な対抗試合を前にクリケットの学校代表チームの主将と会見しているわけだが、アーノルドは主将を激励したと考えるのが自然であろう。そこには、フットボールをあからさまに嫌悪したバトラーや、「怠け者の少年とは、私に言わせればクリケットをやる奴のことだ」⁵⁴⁾と言ったというウィンチェスター校(Winchester College)校長のモバリー(George Moberly)ら、アーノルド以前のスポーツに好意的ではない校長の姿を見ることはできない。だが、ここでヒューズが描くアーノルドは、「クリケット暦中の最大の催しである」はずの対抗試合そのものは観戦することなく休暇に出発してしまうのである。このようなスポーツに対するある意味でドライな態度は、スリングらアーノルド以後の校長達には決して見ることができないものであろう。つまりここには、その後のアスレティシズムに支配された校長達とは異なるアーノルドの真実の姿をはっきりと見ることができるのである。

4. 結語

マッキントッシュは、「組織的ゲーム礼賛の始まりは、しばしばアーノルドの功績によるものとか、或いはアーノルドに負うものとされてきたが、それはトマス・ヒューズの小説『トム・ブラウンの学校生活』が犯した過ちなのである」と言った。しかしながら、「過ち」を犯したのは『トム・ブラウンの学校生活』と言うよりも、この小説を読んだ読者達だったのである。主人公トム・ブラウンの活躍に拍手喝采を送った読者は、物語全体から受ける強烈な印象によってアーノルドとスポーツを直接的に結びつけ、アーノルド神話は一人歩きを始めたからである。

これまでのパブリック・スクール研究者達もそのことには気がついていて、気がついていてからこそ、アーノルドを知る資料としてではなく、『トム・ブラウンの学校生活』は作者ヒューズの思想との関係が問われ、阿部やトーマーの見解に見られるように、この小説には、ヒューズが参加していたキリスト教社会主義の思想が反映されていると解釈されることになったのである。

けれどもここには、「過ち」を犯したのは読者であったにもかかわらず、この小説自体をアーノルドを知る資料として再検討してみるという取り組みが欠落していた。即ち、物語全体から受ける印象から導かれるアーノルド像を問題にするのではなく、アーノルドとスポーツが関わる個々の描写を検討することによって、ヒューズが描いたアーノルドの姿の真偽を問うという作業が手をつけられないままだったと言えるのである。この作業を残したまま、『トム・ブラウンの学校生活』を、アーノルドの真実の姿は伝えていないと断罪することはできない。

本論文における再検討の結果、『トム・ブラウンの学校生活』の中に作者ヒューズが描いたトマス・アーノルドの姿は、決して神格化されたスポーツ教育の祖といったものではなく、むしろスポーツ教育の祖ではなかったアーノルドの真実の姿を、断片的ではあるものの我々に伝えていたということが明らかにされた。このことから、『トム・ブラウンの学校生活』というスクール小説がアーノルドの考え方、特にそのスポーツについての考え方を知る資料として有する可能性を我々は認めなければならないであろうし、この小説がこういった観点から再評価される必要性を認識しなければならないと思われるのである。ただし、本論文で成されたかかる指摘は、『トム・ブラウンの学校生活』というスクール小説が歴史的資料として再解釈できる可能性があることを示唆したに止まる。ここでの指摘を新たな歴史認識とするためには、時代の趨勢を反映するという文学作品が持つ特性なども勘案した上で、更なる厳密な叙述分析が求められる。今後の課題としたい。

注

- 1) この小説の中で主人公のトム・ブラウン達が興じているフットボールやクリケットといった運動競技は、当時は「スポーツ」とは呼ばれておらず、主に「ゲーム」と呼ばれたものであった。しかし本論文では、近代スポーツの原型となったこれら19世紀前半のパブリック・スクールで行われていた運動競技を、一貫して「スポーツ」と呼ぶことにする。ただし先行研究からの引用においては、フットボールやクリケットなどを指して「ゲーム」或いは「組織的ゲーム」とされている場合もある
- 2) かかる研究動向については以下に整理したので参照されたい。
鈴木秀人：(パブリック・スクールのスポーツ教育とトーマス・アーノルド スポーツ教育の祖 ではなかったアーノルド)，英日文化，53号，4 - 17頁，1996年。
- 3) マンガンも、学者であるだけでなくスポーツを生徒と一緒にプレイしたという点に注目して、スリングを含む数名の校長を「パブリック・スクール校長の新世代」と呼び、それ以前の校長達とは区別している。
Mangan, J.A.: *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School*, (p.41), Cambridge (Cambridge University Press), 1981.
- 4) 以下、訳文は全て前川俊一訳の邦訳書によるが、表記は現代かなづかいに改めた。
- 5) ただし、前川訳の「ラグビー校ぶりの態度と、クリケット精神」の原文は“some Rugby air, and cricket”であるから、「クリケット精神」は前川の意識である。
- 6) マッキントッシュは別の著作においても、アーノルドは「無法活動に結びついていた兎狩りのようないくつかのレクリエーションを禁止し、獵犬団を解散させた」と明確に述べている。
McIntosh, P.C.: *Games and Gymnastics for Two Nations in One*, In McIntosh, P.C. et al. (eds.) *Landmarks in the History of Physical Education*, 3rd edition revised and enlarged, (p.192), London (Routledge & Kegan Paul), 1981.

文献

- 1) Mack, E.C., Armytage, W.H.G.: *Thomas Hughes*, 1st edition, (p.90), London (Ernest Benn), 1952.
- 2) Hughes, T.: *Tom Brown's School Days*, 6th edition, (pp.87 - 111), New York (Macmillan), 1901. (First published in 1857)
- 3) *ibid.*, pp.351 - 357.
- 4) McIntosh, P.C.: *Physical Education in England since 1800*, Revised and Enlarged edition, (p.31), London (G.Bell & Sons), 1968. (First published in 1952)
- 5) Mutimer, B.T.P.: *Arnold and Organised Games in the English Public Schools of the Nineteenth Century*, (p.324), The University of Alberta Ph.D.Thesis, 1971. (Unpublished)
- 6) 阿部生雄：(スポーツ教育とチーム・スピリット アーノルド)，岸野雄三ほか(編)体育・スポーツ人物思想史，2版，(235頁)，東京(不昧堂出版)，1983年。
- 7) McIntosh, P.C., *op.cit.*, pp.27 - 28.
- 8) *ibid.*, pp.31 - 33 .
- 9) Mutimer, B.T.P., *op.cit.*, p.325.
- 10) Mangan, J.A.: *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School*, 1st edition, (p.17), Cambridge (Cambridge University Press), 1981.
- 11) 阿部生雄，前掲書，239頁。
- 12) McIntosh, P.C.: *Sport in Society*, 2nd edition, (p.66), London (C.A.Watts & Co.), 1968. (First published in 1963)
- 13) 阿部生雄，前掲書，262頁。
- 14) 同上書，264頁。
- 15) 同上書，264頁。
- 16) 阿部生雄：(イギリス中等教育におけるスポーツ教育の成立 トーマス・アーノルドのスポーツ教育論を中心に)，影山健ほか(編)スポーツ教育，3版，(76頁)，東京(大修館書店)，1981年。

- 17) 同上書, 61頁。
- 18) McIntosh, P.C. : Games and Gymnastics for Two Nations in One, In McIntosh, P.C.et al. (eds.) Landmarks in the History of Physical Education, 3rd edition revised and enlarged, (p.193), London (Routledge & Kegan Paul), 1981. (First published in 1957)
- 19) Mutimer, B.T.P., op.cit., p.325.
- 20) ibid., p. iv.
- 21) Mangan, J.A., op.cit., p.28.
- 22) McIntosh, P.C., op.cit.18), pp.194 - 195.
- 23) McIntosh, P.C., op.cit.12), p.66.
- 24) Mangan, J.A., op.cit., p.22.
- 25) 阿部生雄, 前掲書6), 289頁。
- 26) 同上書, 291 - 292頁。
- 27) Tozer : (Thomas Hughes : 'Tom Brown' versus ' True Manliness'), Physical Education Review, 12(1), p.44, 1989.
- 28) ibid., p.44.
- 29) ibid., p.46.
- 30) Mutimer, B.T.P., op.cit., p.205.
- 31) Briggs, A. : Victorian People, Minor Revised edition, (p.162), London (Penguin Books), 1990. (First published in 1954)
- 32) ibid., p.162.
- 33) ibid., p.162.
- 34) ibid., p.162.
- 35) McIntosh, P.C., op.cit.4), p.25.
- 36) ibid., p.35.
- 37) ibid., p.40.
- 38) ヒューズ, T. (前川俊一訳): トム・ブラウンの学校生活(上), 9版,(129頁), 東京(岩波書店), 1989年。
- 39) Stanley, A.P. : The Life and Correspondence of Thomas Arnold, D.D.Vol. , 5th edition, (p.233), London (B.Fellowes), 1845.
- 40) Wymer, N. : Dr.Arnold of Rugby, 1st edition, (p.182), London (Robert Hale), 1953.
- 41) McIntosh, P.C., op.cit.12), p.66.
- 42) ヒューズ, T. (前川俊一訳): トム・ブラウンの学校生活(下), 8版,(15頁), 東京(岩波書店), 1989年。
- 43) Wymer, N., op.cit., p.142.
- 44) Stanley, A.P. : The Life and Correspondence of Thomas Arnold, D.D.Vol. , 5th edition, (p.38), London (B.Fellowes), 1845.
- 45) ヒューズ, T. , 前掲書38), 150頁。
- 46) McIntosh, P.C., op.cit.12), p.66.
- 47) 阿部生雄, 前掲書6), 263頁。
- 48) Mangan, J.A., op.cit., pp.22 - 42.
- 49) Hughes, T., op.cit., pp.196 - 205.
- 50) McIntosh, P.C., op.cit., p.192.
- 51) ヒューズ, T. , 前掲書38), 150 - 151頁。
- 52) ヒューズ, T. , 前掲書42), 56頁。
- 53) 同上書, 168頁。
- 54) McIntosh, P.C., op.cit.4), p.28.

A reconsideration of “Tom Brown’s school days (1857)”
A focus on the possibility of a historical material
which can tell Thomas Arnold’s views on sporting activities

Hideto SUZUKI

*Department of Health and Sport Science **

Abstract

“Tom Brown’s school days” by Thomas Hughes was published in 1857. In this school novel, Hughes gave vivid descriptions of the boys in Rugby School playing sporting activities such as football, cricket and other outdoor pursuits. Therefore, this novel influenced powerfully a formation of the reputation that Thomas Arnold, the headmaster of Rugby School, directly promoted football or cricket for their educational value.

However, many academic studies which have been done since the 1950’s revealed that this general image of Dr. Arnold was not the fact. As a result, the status of Arnold as an origin of sport education was denied and the estimation of “Tom Brown’s school days” as a historical material fell down considerably.

The purpose of this paper is to reconsider the present estimation of this novel through examining some descriptions related with Arnold and sporting activities in the story. The analysis conducted in this paper has made clear that “Tom Brown’s school days” told us the truth of Arnold’s views on sporting activities. Consequently, the value of this novel as a historical material for understanding the truth of Thomas Arnold should be reassessed.